

◆【海員随想】BISKRA号航海記(22)① 新木繁雄

7月21日 紅海航行中

特に変わったことなし。快晴で平穩無事な航海。靄がかかったように見える大気中に、砂漠の砂ぼこりが含まれているらしい。デッキ上にいつの間にか、うっすらと茶色の砂がたまっている。レーダーには陸が映っているが、肉眼では全然見えない。太陽もかすんで見える。

ハクセキレイがデッキ積みの材木の下に潜んでいて、昆虫が飛んでくると素早くキャッチして食べている。またツバメもたくさん飛んでいる。それらを狙って、マストにハヤブサが1羽、目を光らせている。暗くなって、かなたこなたでコオロギが鳴き出した。

今日もまたアルジェリア・クルー3人の散髪をしてやった。

7月22日 午前7時 スエズ着

右アンカーはスムーズに出たが、左アンカーは出なかった。アンカーシステムの応急修理は、どのようにしたらよいか分からない。

私がシンガポールでロイドのインスペクターに示したように、収めた状態でアンカーシヤクトップ(錨の棒の頭)がホースパイプに当たらないようにふくらみを作れば、間違いなくアンカーは自重で落ちるけど、船体の強度などに影響するから、一保証技師が簡単に口出しできる問題ではない。造船所で修理方法を検討し、次の停泊地フランスのセテで行うよう依頼電報を打った。

午前11時、待機バース(錨地)へシフト。このバースへアンカーしたら、待機が長くなるかもしれない。隣にアンカーしているギリシャ船は、17日間待っているとの話だ。船主が運河通過料を払わないからだろう。

午後、1号発電機3番シリンダーのカバーパッキンより、ガス漏れ発生。ちょうど上にある火災センサーが感知し、危急サイレンが鳴った。アルジェリア・クルーを4人手伝わせ、シリンダーカバー開放。パッキンを取り替えた。機関室が40°C近くあるので、しゃがむとズボンの尻から汗がしたたり落ちる。2時間ほどの作業だったが、ものすごく疲れた。

夕方、土地の漁師が5メートルほどの丸太の先に、200ワットほどの電球をつけたのを持ってきて、本船の左舷から突き出し、本船の電源に差し込んで点灯して魚を集めだした。魚がたくさん集まったところを網で囲み、文字通り一網打尽にすくい取ってしまう。

電灯の下へアジ釣りのサビキを入れたら、コアジが面白いほど釣れる。20尾ほど釣ったところで、漁師が文句を言ってきた。「自分らが集めている魚だから釣るな」と言う。そこでライトの差し込みを引き抜いて電灯を消してやったら、泣きそうな顔で「つけてくれ」と頼みにきた。「アジをバケツに1杯持ってくればつけてやる」と言ったら、先ほど取れたアジをバケツに1杯持ってきたので、つけてやった。

もらったアジをフライにして、機関長室で飲んでいたら、無線士も顔を出した。彼はアルコールは飲まないが、魚はすごく好きで、むさぼるように食べていた。

「海員だより」